

No.20 牛島 達治 「古典的な交信機器、伝声管」

Tatsuji Ushijima

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 8月1日付 立川市市報記事より

友人に言われて「超力戦隊オーレンジャー」という子ども向きビデオを見た。ファーレ立川で女の子が「風の音を聞いているの」と答えるところから話は始まる。この映画でファーレ立川は、風や未来の音を聞き、地球の鼓動を感じず美しい舞台装置をもった都市として扱われていた。主人公の女の子がペデストリアンデッキの上で作家・牛島達治が望む通りに「電子のネットワークによって繋ぎ合わされた街」の中で「古典的な交信機器、伝声管」によって人間的な自然の音を聞いている場面は美しい。思えばオーレンジャーは未来の科学が行きつく果てにあるものたちと、自然の側にいる子どもたちとの闘いであって、「ファーレ立川」が子どもの側にいることは、当たり前だが嬉しいことだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

街の中に、恒久的に表現物が在り続けるという事。これは、日常という雰囲気の中にさらされ続けるという事。路傍の石として在り続けるという事である。

華やかに振る舞うもよし。荘厳にたたずむもよし。また、人なつこく語り掛けてもよし。無関心にただ在るだけでもよい。様々な在り方が考えられる。

私は、その様な場所を大衆の中の一人として体験してきた。

ギャラリーや美術館といった、美術的雰囲気の中で実験としての表現活動が続けていく時、多くの表現者が突きあたってきたらう、壁だとか台座などの支持体の問題は、うつわであるその建築の持つ意味合いにまで及ぶ。

その殻の外ではいったい何が起こるか、言わば書を捨て街に出ようという様な事と似ている。

これは、自らの表現を問い直す故である。

そして、この“立川”という“新しい街”の中でのアートプロジェクトは、第三者的に体感してきた事に対する批判的視点と、場としての自らの表現の領域の拡張を実践するというとむずかしいが、殻を取られたヤドカリが社会的サバイバルをするということには、絶好のチャンスとして到来した。

ここでも文明ということを通じてヒトとは何か、自分とは何かさぐるという基本的視点は変わらないが、いつもの物理的な動きとは縁を切って、電子のネットワークによって繋ぎ合わされた街に“古典的な交信機器、伝声管”を街の中の構造物にひっそりと寄生させる事を試みる。

そして、それが街の中のオカザリではなくイシコロで在る事を祈る。